

美術は歴史の課題にどのようなアプローチが可能か。昨年の薩摩侵攻400年、「Insta11609」展は美術ファンとして純粹な発想から企画したものだ。琉球の薩摩支配下と江戸幕府への従属、さらに中国との冊封外交。その関係を当時の尚寧王は、今で言う「苦渋の選択」をしたのか、それとも「強いられた」いや「主体的選択」だったのか。薩摩の暴力的な誓約書「起請文」に、ただ一人「NO」を突きつけ斬首された謝名親方の存在が気になる。王と謝名における選



おきなわ美術コラム

視線

上原 誠勇

択の距離と主体認識は今日でも問われることだろう。その根底には、今日の沖縄の自衛隊基地受け入れや、米軍基地問題における「自己決定権」と「主体性」に通じる同質の問題が内包していると思える。

同企画展は400年の長い時間が過ぎた現在から、その心性の本質に迫る試みであった。同時に世界のマインリティーが抱え込まされた大きな普遍的課題に通じると思われたのである。

琉球の伝統音楽をベースに、時空に潜伏するモノに敏感に反応し、むず痒い身体を可視化した金城満。昭和天皇像をカラーシユして日本近代と沖縄の昭和史をあぶり出した大浦信行。紅型の技法を現代美術に取り込み、琉球・沖縄のヒーローたちを描いた照屋勇賢。太平洋戦争の戦渦の中、空を

真の意味の「友好」とは

見つめる沖縄の少女の写真からデッサンをおこし、未来のあなたを見つめる木彫刻の少女像を生んだ儀保克幸。企画者として十分な手応えであった。4氏の作品には、歴史の地下深く、岩盤のように横たわるヤマトと沖縄の問題を浮上させ、本質に迫るものがあった。

昨年夏、55年体制の政治から政権が変わり、政局が様変わりした。鳩山由紀夫さんの「対等な日米関係」は刺激的だ。裏をかえせば対等ではない現実認識ということだ。昨年から新聞やテレビのニュースで、連日普天間基地問題が流れる。

県外、国外、現案の辺野古、いや嘉手納、伊江島、下地島などと、米国高官の高圧的な発言におびえ、コロコロ変わる関係各大臣の姿がみられる。普天間問題は「沖縄の問題」、まるで

人ごどのようなニュアンスで報じる本土メディア。名護市が辺野古を受け入れたら万事OKで済む問題か？ ヤマトの人は沖縄を足で踏みつけている自分に気が付かないのか？ 分かっている、分らないふりをしているのか。目の前(国内)に対等でない現実がある。

今年日米安保改定50年を迎える。安保は同盟に変化し軍事(暴力)的圧力による友好関係の構築にはかからない。隣国の韓国や中国とは友好だろうか。真の意味で「友好」とは？ 今年はこのシンプルなお題が問われそう。画廊企画は「安保Friendship」をテーマに展開を予定している。このハードコアな問題に美術がどのようにカタチを表すか楽しみだ。

(画廊沖縄代表)